



90周年式典会場。

10月12日札幌グランドホテルにおいて、北海道大学医学部創立90周年記念式典・記念講演会・祝賀会が盛大に執り行われました。関係者の皆様大変お疲れ様でした。本号では安田研究科長の式辞の全文と式次第を掲載します。

CONTENTS

◆研究科長より

北海道大学医学部創立90周年について …… 1

◆学内行事

医学部図書館の竣工 …… 4
フラテ祭2009開催報告 …… 5
オープンキャンパスを開催して …… 6

◆受賞

核医学分野 玉木教授
Hermann Blumgart Award受賞 …… 7

◆学術・教育・一般

国際ジョイントシンポジウム …… 8
北大元気プロジェクト …… 10
臨床研修マッチングに参加して …… 11

◆お知らせ

医学部創立90周年募金活動 …… 13
第52回東医体について …… 13

◆事務部から

… 15

1 研究科長より

北海道大学医学部創立90周年記念式典式辞

安 田 和 則 北海道大学医学部長



安田研究科長の式辞

本日、文部科学省、北海道ならびに札幌市からご来賓をお迎えし、また佐伯総長をはじめ副学長・理事、部局長の諸先生、名誉教授、そして同窓生の皆様のご臨席を賜り、ここに北海道大学医学部創立90周年記念式典を挙行できますことは、私どもにとりまして誠に光栄であり、また心からの喜びとするところであります。ここに医学研究科・医学部教職員一同を代表してご臨席の皆様にごより厚く御礼を申し上げます。

北海道大学医学部は北海道帝国大学が創設された翌年の大正8年に設置され、今日まで90年の星霜を経て発展

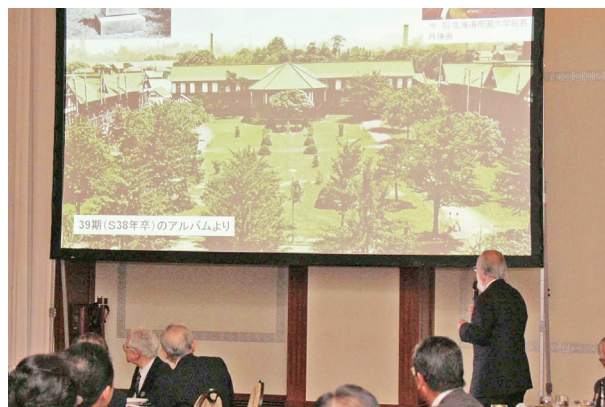


特別講演を行う三浦雄一郎氏

してまいりました。北海道大学医学部医学科は、北海道大学の教育理念である「開拓者精神」、「全人教育」、「国際性の涵養」、「実学の重視」を医学領域において具現化すべく学士教育に力をいれ、次世代を担う医学研究・教育者および先端医療の中心を担う指導医を育ててまいりました。これまでに約9,000名の卒業生が巣立ち、国内はもとより、世界各国で活躍しています。北海道大学大学院医学研究科は昭和30年に設置され、平成12年の重点化により大学院講座制へ移行しました。本医学研究科では各医学領域で世界をリードする優れた研究を行う中で、医学部の教育理念を更に進めた大学院教育を行ってまいりました。これまでに約6,500名が学位を取得し、

ある者は医学研究・教育分野で世界に羽ばたき、ある者は世界最高レベルにある本邦の医療を支えて臨床分野で活躍しております。さらに平成15年には4年制の北海道大学医学部保健学科が設置され、看護学専攻・放射線技術科学専攻・検査技術科学専攻・理学療法学専攻・作業療法学専攻の5専攻において、医療の現場で欠くことのできない高度専門職医療人を養成しております。これまでに約385名の卒業生が巣立ち、本邦の医療を支えております。

医学部・医学研究科における教育は、優れた医学研究および診療と表裏一体の関係にあります。我々教職員一



祝賀会にて旧医学部校舎の写真の前で思い出を語る菊地浩吉元札幌医科大学長（33期）

北海道大学医学部創立90周年記念

記念式典

司 会：北海道大学教授	福田 諭
式 辞：北海道大学医学部長	安田 和則
挨拶：北海道大学総長	佐伯 浩
北海道大学創立90周年 記念事業後援会長	廣重 力
祝 辞：文部科学省高等教育局 医学教育課長	新木 一弘
北海道知事	高橋はるみ
札幌市長	上田 文雄
北海道医師会長	長瀬 清

記念講演会

司 会：北海道大学教授 岸 玲子	
演 題「糖鎖医学～北大から世界へ～」	
大阪大学産業科学研究所教授	谷口 直之
座長 北海道大学教授	本間 研一

期 日：平成21年10月12日（月・祝）

会 場：札幌グランドホテル 金枝の間・グランドホール

演 題「極限への挑戦～75歳エベレスト登頂～」	
プロスキーマー	三浦雄一郎
座長 北海道大学医学部長	安田 和則

祝 賀 会

司 会：北海道大学教授	櫻木 範明
挨拶：北海道大学医学部長	安田 和則
北海道大学医学部同窓会長	齋藤 和雄
祝 辞：北海道大学総長	佐伯 浩
札幌医科大学長	今井 浩三
祝 杯：旭川医科大学長	吉田 晃敏

『写真で振り返る医学部90年の歴史』

北海道大学教授	松下 通明
北海道大学教授	田中 伸哉
乾 杯：北海道大学病院長	浅香 正博

同は、多くの先人によって築かれてきた基幹総合大学医学部としての伝統と責務を深く理解し、歴代の医学部長の指揮の下で丸となって教育・研究・診療に日夜励んでまいりました。現在、医学研究科では先端的研究手法を駆使して、生体構造・機能の発達や老化機序の解明、環境が生体に与える影響の解明、現代における社会医学的諸問題の解決、遺伝子学、物理学工学、材料科学などを応用した病因解明および先端診断・治療法の開発など、世界をリードする多くのユニークな医学研究が行われています。現在、本医学研究科では、これらの研究を基盤として厳しい競争の中で採択された「未来創薬・医療イノベーション拠点形成」、「橋渡し研究支援推進プログラム」、「先端的光イメージング研究拠点形成プロジェクト」などの国家的大型研究プロジェクトが着実に成果を上げております。また最近、「最先端研究開発支援プログラム」が本医学研究科から選定されたことは、我々の大きな誇りとするところです。加えて本医学研究科の教員は本学の「実学重視」の精神を胸に高い臨床力を誇り、北海道大学病院が北海道における「最後の砦」病院としてその役割を果たし続けているその本体を担い、その中でいくつもの世界をリードする臨床研究を行っていることも我々の誇りとするところであります。我々は今後も不断の努力を傾注し、本邦のみに留まらず、世界の医学・医療の進歩発展に寄与していくことを決意いたしております。

もとより北海道大学医学部の90年は、平坦な道ばかりではありませんでした。これまでの歴史の各節目においては多くの先人・諸先輩が言葉に表しがたい労苦を重ねられ、その上に現在の本学部が存在していることを、我々は忘れたことはございません。また本学部が種々の困難に直面したときには、有形・無形のご支援・ご厚意を大

学当局および多くの同窓生からいただいてまいりました。我々はそれらに対する感謝も忘れたことはございません。特にこの度の創立90周年記念事業に当たりましては、同窓会員の皆様、更には篤志家、団体、企業の皆様からのご寄附によりまして、医学部の悲願でもあり、医学部同窓会の結束を示す証でもある学友会館を建設していただけることになり、北海道大学医学部・医学研究科教職員および学生を代表し、この場を借りまして厚く御礼を申し上げたいと存じます。この教育・研究施設は、これまでにご寄附をいただいた多くの施設や設備と同様に、次世代を担う若い学生・研究者がその手で新しい歴史を作っていく礎石となるように、心して大切に使用させていただきたいと思っております。

本日、北海道大学医学部は90周年という一つの節目を越えて、100周年へ向かって歩み始めます。歴史の節目を祝うことの意味は、過去を冷静に振り返り、先人の業績の上に立っている現在の我が姿を直視し、そして明日の生き方を考えることにあります。我々は次の10年間に北海道大学医学部・医学研究科がさらに発展できるように、また世界の医学・医療の進歩、ひいては人類の幸福のために今まで以上に大きな貢献が出来るように、教育・研究・診療が三位一体となった我々の重い使命に全力で取り組む所存でございます。そして10年後に北海道大学医学部が、その輝かしい伝統に対して尊敬を集める100周年を迎えることができるように最大の努力をしていくことをここにお誓い申し上げます。

最後に、本日ここにご臨席賜りました皆様をはじめ、多くの方々に、今後とも、北海道大学医学部に対しまして、何卒、より一層のご指導とご支援をいただけますことをお願い申し上げ、私の式辞といたします。本日はご臨席を賜り誠に有難うございました。



祝賀会主賓席の薔薇

2 学内行事

北海道大学医学研究科・医学部図書館の竣工

安田 和 則 医学研究科長



新装の図書館正面。2階右手奥に新設された南棟との連絡通路がみられる。

旧医学部図書館は昭和40年代に北海道大学医学部同窓会の寄附などで建設され、近年、その低耐震性と老朽化が問題となっておりました。また近年のインターネットの普及によって図書館のニーズは大きく変化し、図書館を利用する研究者数や貸出する本の数は激減しました。また学生の勉強の仕方も変化し、図書館には参考書を利用しての自習室としての機能が強く求められるようになりました。一方、北海道大学医学部全体の教育環境に目をやれば、第一・第二講堂の老朽化、第三・第四講堂の狭隘、試験や実習を行う第五講堂の不足などに緊急の対策が必要でありました。

こうした状況の中、北海道大学医学研究科・医学部図書館は、本来の図書館機能を損なうことなく現在の学生・研究者のニーズに応え、さらに学生の教育環境の改善にも資する施設として本年8月14日に竣工しました。正面の書庫には効率的収納が可能な電動書架を導入して12万5千冊の書籍を収容しています。書庫から戻ると受付の右隣には複写室があり、受付の前を進むと書架を有する閲覧・自習室があり、その角には7台の検索端末PCが設置されています。このように1階は、主として研究者・学生の閲覧、検索、貸出スペースにあてられています。2階



2階フロアー。学生の憩いの場となる設計。

にも書架を有する広い閲覧・自習室があり、また学生のインターネットを介する情報アクセスを支援するため、40台のPCを備えた学生用IT室があります。またこの階には多目的室やラウンジを備えており、学生や研究者が勉学に励む一方でくつろぎも取れる快適な空間となっています。この階の一角には男女ロッカー室があり、またこの階と医歯学総合研究棟の実習室とは南研究棟を介して渡り廊下で連結され、学生の勉学導線は大幅に短縮され、天候に左右されない快適なものになりました。3階には、今までの第一・第二講堂の面積の約1.4倍の基礎講義室が2つできました。この基礎講義室を造ることの必要性に関しては様々な背景があり、その詳細は最近に発行された医学部同窓会新聞で説明させていただきました。講義室の横にはアメニティホールも用意され、学生に対する教育環境は昨年と比べてはるかに向上しました。

北海道大学医学研究科・医学部新図書館は北大図書館本館および北図書館とリンクして従来の図書館の機能を保有しつつ、現在の医学生に充実した教育・学習環境を与える新しい概念の図書館として、今後の医学教育・研究における新しい知の拠点になることが期待されます。



熱心に討論する5年生。奥は各運動部の歴史と伝統を物語るトロフィー。



生化学畠山教授の講義風景。講義室の天井には正面の大スクリーンと同じ画面がうつしだされるモニターが並ぶ。

フラテ祭2009 開催報告

フラテ祭実行委員会事務局

去る9月20日、爽秋の空のもとでフラテ祭2009が開催されました。5連休2日目の開催にて全国からの参加を企図した結果でしょうか、第1部の施設・キャンパスツアー130名、第2部講演会90名、第3部71名とのべ291名の今までにない参加をいただきました。

第1部はAコースとして医歯学総合研究棟の法医学剖検室・電子顕微鏡室などの実験施設を紹介し、Bコースでは北大病院内の地下放射線部施設・手術室の見学・解説を行い、Cコースでは総合博物館・北キャンパスなどバス2台で北大構内全体を案内致しました。

第2部では安田和則医学部長より医学部・医学研究科のインフラ整備の状況や先端的研究プロジェクトの推進状況などから、医学部創立90周年記念事業の成취に向けて活動していることが報告されました。玉木長良北大病院副院長からは医学研究科と日立製作所・シオノギ製薬などとの産学協同の“未来創薬・医療イノベーション拠点形成”の超大型プロジェクトの展開について紹介しました。次いで、北大放射線科出身で放射線医学総合研究

所理事の辻井博彦千葉大学／群馬大学教授からは北大在籍時代の出来事から、陽子線治療から最近の重粒子線治療の現況を話していただきました。

第3部の交歓会は、北大交響楽団による弦楽四重奏の歓迎により、初めに音羽博次奨学基金授与式は音羽先生出席のもとに執り行われ、8名の医学生・大学院生が授賞しました。次いで、安田医学部長、齋藤和雄北大医学部同窓会長の挨拶があり、祝宴に入りました。祝宴では病理学講座田中伸哉教授による北大医学部90年思い出の写真の解説・クイズなどがあり、“都ぞ弥生”の合唱にて締め括られました。

第3回目となるフラテ祭は多数の学生父母をはじめ、同窓生・企業の方々にも今までにない程多数の皆様に参加していただきました。フラテ祭は北大における教育・研究の成果・抱負を披露し、理解していただくことを目的としております。多くの皆様のご支援により、今年も盛会裡に終えることができました。この場を借りてお礼申し上げます。有り難うございました。



臨床講義棟1階での受付風景。右は監督する野々村副研究科長。



バスツアーのガイドに望む谷野美智枝助教（腫瘍病理、中央）と津田真寿美助教（病態医科学、右）。待機役の王磊君（腫瘍病理、左）。



懇親会で司会を務める西村正治教授（呼吸器内科学）とスピーチをする岡田晃元金沢大学学長（30期）。

第5回（平成21年度）北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科音羽博次奨学基金奨学金授賞式について

今年度で第5回目となる「北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科音羽博次奨学基金要項」に基づく奨学金授賞式が、去る9月20日（日）に開催された「フラテ祭2009」の第3部フラテ交歓会において挙行されました。



挨拶に立つ音羽先生（16期）

応募者は14名で、選考の結果、次の8名に奨学金が授与されました。

医学科	4年	亀田 浩之
医学科	5年	中谷 資隆
医学科	6年	風巻 拓
博士課程	1年	野村 友希子
博士課程	1年	細木 華奈
博士課程	2年	荒木 敦子
博士課程	4年	七戸 夏子
博士課程	4年	真栄田 裕行

2009年度 医学部医学科オープンキャンパスを開催して

岩 永 敏 彦 医学研究科・医学部入試委員会アドミッション実施部会長

アドミッション実施部会はおもに、高校生対象の学部紹介や説明会を担当している。その中で、オープンキャンパスが最も大きな行事であろう。全国的に見て医学部での教育内容はほぼ共通しているし、入学希望者も多いので、説明会を開催する必要性を感じていなかった。しかし、北大医学部の新入生の1/3程度はこのオープンキャンパスを経験している。また、親が医師である割合が5割を越え、親からの具体的情報が大学選定に影響することを考えれば、この説明会をおろそかにはできない。

今年は、自由参加プログラムを8月3日（月曜日）に、高校生限定プログラムを4日（火曜日）に開催した。自由参加プログラム（予約必要なし）では、午前・午後とも定員一杯の150名を越える多数の参加者（合計303名、昨年度は300名）があった。午前の部で定員を超えた分は



臨床大講堂を埋め尽くす高校生を中心とする参加者

午後に回ってもらったが、飛行機などの都合で、午後の部で途中退席者が出たのは仕方がない。参加者の内訳は、札幌市内131名（昨年度136名）、札幌以外の道内100名（同93名）、道外66名（69名）、不明6名（2名）であった。安田和則医学研究科長による挨拶の後、吉岡充弘副研究科長による入試の説明、医学部医学科紹介DVDの映写、医学部・大学病院での教育・研究・診療施設の見学、および質疑応答からなる2時間余りのコースを企画とした。施設見学では、参加した高校生や保護者を7つのグループに分け、アドミッション実施部会員と5・6年次の医学科生がペアとなって各グループを引率し、教育施設（局所解剖室・第一講堂）、研究施設（医歯学総合研究棟の電子顕微鏡室）、診療施設（CT検査室、検査・輸血部、病理部）の6ヶ所を順に訪問した。訪問先では、それぞれの担当者が説明を行った。見学終了後の質疑応答も活発で、大学生活、北大や北大医学部の特色ならびに優れた点、クラブ活動と勉学、留学制度など、高校生が自己の進路を探索するための情報を求めていることを肌で感じた。反省点は、見学コースが少々慌ただしいかったこと、医学部生との個人面談を設けなかったことがあげられる。



質問に答える吉岡副研究科長。奥は司会の岩永教授。

高校生限定プログラムでは、昨年度と同様に、解剖学の講義と実習からなる模擬授業を行った。今年は100名を限度して事前に参加申込みを受け、88名（昨年度は70名定員で58名の出席）の高校生が参加した。札幌市内32名、札幌以外の道内29名、道外27名であった。医学部長による挨拶の後、脳に関する講義を40分ほど行った。ついで、顕微鏡による組織標本の観察実習と、魚類からヒトに至るまでの脳の進化・発達、病理解剖および神経情報伝達に関する展示を中心にした実習を行った。実習には、解剖・病理学の教員・大学院生と医科学者が立ち会い、説明や質問への対応を行った。



高校生に熱心に教える医学部学生。MD/PhDコース1年加藤保崇君（腫瘍病理学分野）。



2日目の高校生限定プログラム。熱心に病理の説明を聞く高校生。左は渡辺教授。

無記名式のアンケートでは、「印象深かったことは？」という質問に対して、「脳の仕組みの説明を聞いて、とても興味がわき、もっと知りたくなった」（旭川東1年、女子）、「電気が神経を通っていることが実際に体験できてよく分かりました。脳は不思議なことが多くもっと知りたくなりました」（金沢泉丘2年、女子）、「ヒトだけでなく色々な動物の脳を見たり、病気のヒトの臓器を実際に見たり触ったりできたこと」（札幌西2年、男子）、「細胞のスケッチが好きなので、高校ではなかなかできない網膜のスケッチがとても面白かった。顕微鏡もすごく良かった」（福島磐城2年、女子）、「脳は他の動物より大きいのに、子供のときでは未発達なところ」（函館中部1年、男子）などの感想が寄せられた。また、満足度の5段階評価（大変面白かった／面白かった／普通／つまらなかった／大変つまらなかった）では、満足度の平均が4.70という非常に高い評価をいただいた。理解度の5段階評価（ほとんど理解できた／結構理解できた／ふつう／あ

まり理解できなかった／ほとんど理解できなかった）の平均が4.03と、どちらも昨年度と同じ高いレベルを示した。

最後に、施設見学で担当していただいた放射線部の加藤徳雄助教、病理部の羽賀博典副部長、検査・輸血部の清水力副部長・鈴木春樹技師長、解剖発生学分野の渡辺雅彦教授、電子顕微鏡室の中村秀樹助教に深謝したい。

また、施設見学で引率や質疑応答を担当したアドミッション実施部会の部会員と吉岡充弘副研究科長、高校生限定プログラムの準備と実施を担当していただいた渡辺雅彦教授、神谷温之教授、田中伸哉教授はじめ基礎系5分野の教員、2日にわたって活躍した医学生（6年の東真澄、加藤容崇、5年の濱崎雅成、石川麻倫、大垣淳、相馬崇宏、村松憲の学生諸君）、そしてこれらの企画全般の計画と運営に奔走していただいた医学科教務担当の齋藤嘉光係長、原田奈緒子さん、脇坂恭匡さんに厚く御礼を申し上げたい。

3 受賞

Hermann Blumgart Award受賞報告

玉 木 長 良 北海道大学医学研究科

2009年6月にカナダのトロントにて米国核医学会(Society of Nuclear Medicine : SNM) が開催されました。毎年参加者は企業の参加を加えると6,000人を超える核医学関連学会としては世界最大のものです。その中で公表されるいくつかの学会賞の中で、心血管部門(Cardiovascular Council) で毎年この分野で活躍した人に栄誉を讃えるHermann Blumgart Awardがあります、今年この賞を私が受賞する機会がありましたのでご報告します。

Dr Hermann Blumgartは米国ハーバード大学の研究者で1925年にラジオアイソトープ（当時はポロニウム）を片腕に静脈注射し、対側の腕に検出機をあてて人体での循環時間を世界で最初に計測しました。彼の名前にちなんでSNMでは毎年心血管部門に貢献した研究者を委員会が推薦し、Hermann Blumgart Awardを付与しているものです。これまで心臓核医学の分野で功績のあった欧米出身の大御所が受賞してきましたが、今年は初めてアジア人から受賞者が出たということでも注目されました。まず受賞講演として循環器領域における分子イメージング研究の発展について北海道大学での先駆的研究成果を中心に30分の講演を行いました。その後の受賞式では今年の心血管部門会長のDr Rory Hachamovitchから楯を受け取りました。

私は長年核医学一筋に研究教育に従事してきており、このSNMとも関係が深く、1980年以来毎年欠かさず出席しています。1998年にはSNMでの大きな賞のひとつGeorge Hevesy Awardを同じくアジア人ではじめて受賞しています。その際にはこれまで自分自身の行ってきたPETの研究と教育者としての功績を評価していただきました。これに対し、今回のHermann Blumgart Awardは主に北海道大学で実施してきた循環器核医学の研究、とりわけPETを用いた分子機能イメージングに関する研究を評価していただいたものです。

この栄誉ある受賞にあたって、これまで私と共に研究に従事してきた北海道大学の研究者をはじめ、関係各位にこの場を借りて深謝します。またこの賞を契機にして、日本をはじめアジア地域での若手研究者が育ってくることを念じています。



4 学術・教育・一般

国際ジョイントシンポジウム

“The 7th symposium for Future Drug Discovery and Medical Care”を開催して
～ “The 1st Hokkaido University -Academia Sinica Joint Symposium” との共催で実施～

和田 雅子 医療イノベーション事業支援室

2009年10月7日（水）8日（木）の2日間、本学学術交流会館、及び創薬基盤技術研究棟・産学コミュニティホールにおいて、“The 7th symposium for Future Drug Discovery and Medical Care”が開催されました。今回は、“The 1st Hokkaido University -Academia Sinica Joint Symposium” との共催方式による、国際ジョイントシンポジウムとして開催され、講演はすべて英語で行われました。これらのシンポジウムには国内外から数多くの参加者にお越しいただきました。ここに、当日の様子等をご紹介します。

最初に当該事業におけるシンポジウムの目的ですが、イノベーションシンポジウムは、科学技術振興調整費による「未来創薬・医療イノベーション拠点形成事業」の一環として、この事業の成果を広く公表するとともに、幅広い研究者間の交流・討論により更なる研究の発展を目指して開催されています。また、今回が最初となる北海道大学と台湾中央研究院（Academia Sinica）とのジョイントシンポジウムは、昨年9月11日に大学間交流協定を締結したのを記念して開催されたものですが、これは同研究院が当該イノベーションプロジェクトとの連携研究を進めていることから今回の共催による国際的な催しを実現したものです。

第1日目は、北大からは佐伯浩総長が、台湾中央研究院からは翁啓恵院長がそれぞれ主催者挨拶をしたあとに、岡田尚武副学長の座長による基調講演が行われました。まず、喜田宏先生（人獣共通感染症リサーチセンター長）は“Avian, swine, and pandemic influenza”の演題で、鳥や豚からヒトに感染し、インフルエンザのパンデミッ

クがおこるしくみを発表されました。次に、李遠哲先生（台湾中央研究院）は“Elementary processes involved in matrix assisted laser desorption ionization”と題した講演をされました。李先生は1986年にノーベル化学賞を受賞された世界トップレベルの科学者ですが、気さくなお人柄を思わせるサプライズを用意して下さいました。2部構成のうち、第1部を日本語のパワーポイントと流ちょうな日本語でご発表され、会場を大いに賑わせて下さったのです。第2部では、質量分析におけるサンプルのイオン化法のひとつMALDI（マトリックス支援レーザー脱離イオン化法）についてご発表されました。

昼食会を兼ねたポスターセッションは会館1階ロビーで行われ、大学の研究者による発表、塩野義製薬、日立製作所、日本メジフィジックス等の企業からの発表を合わせおよそ30件のポスターが掲示され、研究者の皆さんが活発に議論を行っていました。

午後からは“Molecular Imaging for Integrated Medical Therapy”と題したセッションが玉木長良先生（核医学分野）の座長で行われました。招待講演者のワシントン大学（アメリカ）の簗島聡先生は“Progress in Functional Brain Imaging of Dementia”と題して、アルツハイマー病の画像診断・分子イメージングについて講演され、診断と治療との関係が討論されました。続いて台湾中央研究院の胡宇光先生、北大から石川正純先生（医学物理学部門）、永井健治先生（電子科学研究所）とご発表が続き、第1セッションの最後として京都大学・山本雅哉先生のご発表と質疑応答がありました。

休憩をはさんで行われた第2セッション“Glycobiology/ Structural Biology and Drug Discovery”では、ハンズ・J・ガビウス先生（ルートヴィヒ・マクシミリアン大学、ドイツ）の座長で、ジョンズ・ホプキンス大学（アメリカ）の李遠川先生による招待講演が行われました。李遠川先生は“The Road to AvioGlycomics”と題して、鳥類の糖タンパク質に関する広範な研究成果を紹介されたほか、今後の北大との共同研究の方向性も示唆されました。続いての講演者は、台湾中央研究院の黄太煌先生、北大の姚関先生（先端生命科学研究院）、稲垣冬彦先生（薬学研究院）と続き、第1日目の最後に、塩野義製薬から近藤裕郷先生のご発表をされました。全日を通して盛



佐伯総長による挨拶

んな議論がなされた終了時には、会場から大きな拍手がわき起こりました。

初日のシンポジウム終了後は、J Rタワーホテル日航札幌に移動して懇親会会場へ。札幌随一の高さを誇る36階から眺める180万都市の夜景をバックに、彩り鮮やかに供された料理の数々に、約100名の参加者の皆さんからも歓声がわき、午後7時から9時までの2時間、トークやスピーチなどで楽しんで盛り上がりました。

2日目は、会場を創薬基盤技術研究棟の産学コミュニティホールに移し、第3セッション”Mass Spectrometry and its Application in Biology/Medical Science”が行われました。座長・李遠川先生の進行で発表された最初の演者は招待講演者のハンズ・J・ガビウス先生で、“Breaking the Sugar Code of (Tumor) Growth Regulation: Discovery of Effectors and Analytical Challenges”と題して、腫瘍の悪性度とグリカン構造(多糖構造)に関して講演されました。続いて、台湾中央研究院の邱繼輝先生、北大から天野麻穂先生(先端生命科学研究院)、そして日立製作所の坂本健先生、最後に、

アメリカの企業エゾース・サイエンス・インクから三浦嘉晃先生のご発表が行われました。

充実した発表と質疑応答が行われた2日間の最後には、岡田副学長、翁啓恵院長からの閉会の辞があり、今回の共催による国際シンポジウムの成功を祝いつつ、今後の両機関の緊密な連携と先端研究への期待を込めたメッセージが伝えられ、全2日間の行程は成功裏に終了しました。

分子イメージングの研究者や創薬、医療、企業と、幅広い分野の研究者が一堂に会し、最先端の研究紹介を行い、質疑応答をした本シンポジウムでは、2日間を合わせ延べ298名の参加があり、初日に発表された李先生の講演内容は新聞にも報道されました。また当日は、第6回シンポジウムの内容の多くが掲載された、玉木先生、久下裕司先生(アイソトープ総合センター)の編集によるブローチーディング”Molecular Imaging for Integrated Medical Therapy and Drug Development”がSpringer社から出版されたことから、当該書籍を配布することもできました。

次回(第8回)のシンポジウムは年1回の開催になりますので、また詳細が決まりましたらご案内させていただきます。



講演される李遠哲先生



パネルディスカッション風景



ガビウス先生による発表

〈発表者及び題目一覧〉敬称略

第1日目

喜田 宏	Avian, swine, and pandemic influenza
李遠哲	Elementary processes involved in matrix assisted laser desorption ionization
簗島聡	Progress in Functional Brain Imaging of Dementia
胡宇光	X-ray Imaging and Nanomedicine for Integrated Therapy
石川正純	Fundamental Study on Developing Parallel Plane Positron Detector System for Tracking Tumor During Radiotherapy
永井健治	Toward Understanding Biological Phenomena by Genetically-encoded Molecular Spies
山本雅哉	Significance of Drug Delivery Systems in Enhanced Molecular Imaging for Regenerated Tissues
李遠川	The Road to AvioGlycomics
黄太煌	Packaging of SARS Coronavirus Nucleocapsid
姚閔	Structural Basis for Translation Factor Recruitment to the Eukaryotic/Archaeal Ribosomes
稲垣冬彦	Structural Biology of Autophagy
近藤裕郷	Future Direction of Drug Discovery Research

第2日目

ハンズ・J・ガビウス	Breaking the Sugar Code of (Tumor) Growth Regulation: Discovery of Effectors and Analytical Challenges
邱繼輝	Enabling Mass Spectrometry Techniques for Phosphoproteomics and sulfoglycomics
天野麻穂	Comparative Glycomics
坂本 健	Analysis of Site-specific Glycosylation Profile in Glycoproteins by LC-ECD-MS/MS in a Radio Frequency Linear Ion Trap
三浦嘉晃	Glycomics from Bench to Bedside Getting Sweeter



座長の玉木先生



石川先生による発表



パーティの様子

北大元気プロジェクト2009「世界の子どもをつなぐ教室」実施の御報告

大 竹 裕 子 修士2年 公衆衛生学分野

《はじめに》

2009年8月8日（土）・22日（土）・23日（日）の日程でJICA札幌を会場に、北大元気プロジェクト2009並びに外務省日メコン交流年の一環として「世界の子どもをつなぐ教室」を開催いたしましたので御報告させていただきます。

北大元気プロジェクトは北海道大学が学生活動を活性化させる目的で実施している事業です。北大生による活動団体がプロジェクト申請を行い、選考委員（北大内の教員）から審査を受け、採択されると50万円以内の活動費が支給されます。この春、「世界の子どもをつなぐ教室」実行委員会の代表として申請を行い、選考委員の先生方から高い御評価を頂き活動費の助成を受けることができました。本事業は他に国際交流基金からも助成を受け外務省日メコン交流年事業として採択されています。

《プログラムについて》

「世界の子どもをつなぐ教室」は札幌市の高校生を対象とした異文化交流プログラムです。北海道大学・北海道教育大学札幌校の学生による実行委員会がプログラムの企画・実施・評価を行っています。近年、国内でいじめや携帯依存など青少年問題が社会的に注目されるよう

になったことを受け、異文化圏（開発途上国）に住む青少年との交流を通して日本の青少年のメンタルヘルスを向上させようとするのがこのプログラムのねらいです。

プログラムの最大の特徴は、手紙を用いた交流を行うことです。従来の国際交流は、渡航費が高く誰もが気軽に参加できない、1対1の交流が難しく深まりがないといった問題がありました。実行委員会ではこれを解決する方法として手紙交換を提案し実施しています。日本⇒相手国⇒日本の順で参加者に手紙（返事）を書いてもらい、実行委員が配達します。相手国への渡航は大学生の途上国スタディ・ツアーとしても機能しています。

本年度はカンボジアとインドを交流相手国とし、8月9日（日）～21日（金）の日程で9名の学生が渡航しました。インドでは児童労働リハビリ施設で子ども達と寝食を共にし、また児童労働の現場の一つであるスラムに行き、今まさに児童労働に従事している子どもたちにインタビューを行いました。カンボジアではNGO学校、ゴミ山に住む子どもたちなどを訪ねました。この様子は、北海道大学サステナビリティ・ウィーク2009の一環として11月14日（土）・15日（日）に「世界の子どもをつなぐ教室」報告会にて公開され、NHK札幌放送局のニュー



カンボジア：ゴミ山の住居



カンボジア：手紙を書く様子



札幌：プログラムの様子

スでも取り上げられました。

《プログラムの効果》

本プログラムが日本の高校生のメンタルヘルスを向上させたか否かを評価するため、標準化された尺度を用いてQOL、抑うつ等を測定し、プログラム前後で比較しました。また非参加者によるコントロール群も設け比較を行いました。

参加者のうち評価に協力した22名（回収率75.86%）の実施前後でt検定を行った結果、QOL（「自分の生活環境に対する満足度」など）とセルフ・エフィカシー（「自分はこの世の中に貢献できると思う」など）で1%水準

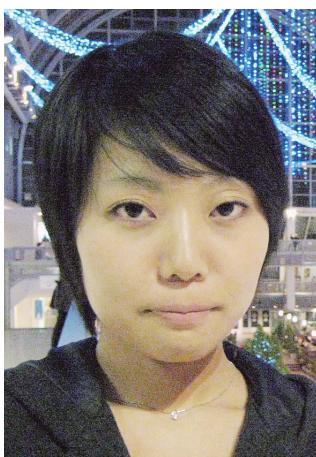
の有意差がみられ、プログラムの効果が示されました。さらにこの結果を11月2日（月）に開催されたサステナビリティ・ウィーク2009学生研究ポスターコンテストにて発表し、実学探求部門優秀賞を頂きました。

《謝 辞》

本事業は、北海道大学と国際交流基金から助成を受け、JICA札幌、ユニセフ北海道支部、札幌ユネスコ協会の御協力並びに北海道大学公衆衛生学教室員の皆様のご理解を得て無事、実施することができました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

臨床研修マッチングに参加して

飯 田 あか奈 北大医学部6年



平成16年の初期臨床研修制度開始以来7回目となる臨床研修マッチングが、この夏から秋にかけて行われていた。そもそも「マッチング」の名称は、厚生労働省指導下にあるマッチング協議会において、コンピューター上で研修希望者と研修病院双方の希望順位を踏まえて上位から順に「マッ

チさせていく」ことを示しているが、個々の病院で行われる「研修医選抜試験」のことも通称「マッチング」と呼称されることが多くなっている（用例:「次のマッチングいつ?」「マッチングのために来週東京に行く」など）。

臨床研修マッチングへの参加は、インターネット上のマッチング協議会のホームページにて参加登録を行うことから始まる。以降の作業はすべてインターネット上で行われることになる。そのためメ切りはかなり厳密であり、1分でも遅れたものは来年の就職の機会を一瞬にして失うことになるので、作業自体は簡易だがある意味非常に緊張感を伴っている。

参加登録後、学生（実際には既卒者、海外留学生なども含む）は各病院で行われる研修医選抜試験、つまり通称の方の「マッチング」を次々と受験していくこととなる。マッチング開催回数、形式は病院により多種多様で、一度きりのところもあれば、地元だけでなく首都圏にも会場を用意する病院、学生の希望により随時行うと

いう病院もある。受験には事前の院内実習を必要とするところがほとんどで、実習中の評価がマッチング結果のほぼすべてを決めるという病院も少なくないと聞いている。マッチング自体は面接を中心に、筆記試験、小論文など一般的な内容になっている病院がほとんどだが、中には一般企業の就職活動で用いられるSPI（Synthetic Personality Inventory、適性試験）を導入している病院もあり、どのような試験を課すかに病院の望む研修医像が透けて見えるともいえる。

一通り希望病院の受験が済めば、10月末までにマッチング協議会に希望病院の順位を登録する。この際、受験はしてみたものの気が変わり、やはり研修はしたくないという病院は登録しなくとも良い。同時期に、病院側も選考を行ったもののうち採用してもよいと考える学生の順位をマッチング協議会に登録する。マッチング制度が始まったことで、従来は採用・不採用の2択で採用試験を行っていたが、学生に順位をつけるという方針が変わり、面接がより難しくなったとおっしゃった先生もいらし、なるほどと思ったこともあった。期限より数日後には規定のアルゴリズムに則ってコンピューター上で組み合わせられたマッチング結果が公表される。このとき、学生側も病院側も自分のページにログインすると決定済みの事項しか表示されない（学生側には病院名がひとつ、病院側には採用数の学生名だけが並ぶ）。自分が希望病院で何位にランクされていたのか、自分は病院側が元から希望していた人材なのかそれとも繰り上がり当選なのかは、わからない。また、一般就職のようにいくつかの内定をもらい、手持ちのカードの中から最終的に自分が行きたいところを選択する、ということもできない。このあたりが少々もどかしさもあるが、少なくとも学生の

希望のほうが病院側の希望よりも優先されるような仕組みにはなっており、アルゴリズムには不公平な部分はないので、決定事項には納得するしかない。ちなみに今年は研修期間、内容に関する変更があったため、移行措置としてすべてのスケジュールが例年よりも1ヶ月ほど遅れている。来年以降のスケジュールは、定かではない。

私は市中病院（札幌2つ、東京1つ）と大学病院1つを受験した。全国平均並みの数であるかと思う。現在は昨年や大学回帰の流れになってきたものの、全国的にはいまだ市中病院人気の流れにある。私個人は札幌で生まれ育ち、当初は札幌での研修しか考えていなかったものの、将来を北海道の医療に従事して過ごすのならば卒業後数年の時期くらいは大都市で忙殺され、たたき上げられるのもいいかと思い、札幌で第一希望と考えていた病院と毛色の似た病院をひとつ試しに受験した。結果的に、現在問題となっている研修医の首都圏集中、地域偏在に与してしまったことになる。しかし自分個人としては非常に良い経験となり、視野が広がった。東京の病院は受験者数が多いため、午前に筆記試験を行って不合格なら即帰宅、午後の面接すら受けさせてもらえないというシビアなもので、これはわざわざ往復交通費＋前泊代数万をかけて行く自分には酷なシステムだった。最後の夏休みを賭して勉強し、何とか午後までしぶとく居残って帰ってくることができた（前日ふらりと偶然出会った友人が、まったくの偶然で過去問を提供してくれたことも大きかった。感謝）。札幌での受験は何度か実習でお世話になった病院ばかりで、顔見知りの先生が多く面接もなごやかに進んだ。面接で問われる内容は、「自分の長所と短所」「志望科の理由」「大学での活動について」など一般的なものがほとんどだったが、中には「医療は弱者のためのものといわれているがどう思うか」「コメディカルとはいかに連携をとるか」といった予想外の質問もあり、医療のプロを前にしてどう答えても机上の空論となりそうで、緊張するようなシーンもあった。セクハラではないけれども、という前置きに続き、「仕事を続けていく上で女性ということは影響すると思うか」という質問も何度か受けた。「うまく答えること」というよりも「この病院のカラーと合うかどうか適性にジャッジしてもらうため、自分をありのままに提示すること」が重要だと考えていたため、感じていることをそのままお話しすることに終始した。優秀そうな周囲の受験者に終始

びくびくしており、面接会場から時折聞こえる高らかで自信のありそうな声にひやひやすることも多かったが、落ち着いて自分自身をプレゼンすることだけをやってきた。統計によれば約80%の学生が第一希望にマッチしており、90%以上の学生が第二希望までの病院にマッチしている。自分も、順位こそ第2希望ではあったが、非常に行きたい気持ちの強かった札幌の市中病院にマッチすることができた。周囲でもマッチングに失敗したという噂はあまり聞かない。初めてのことで、事前の心配は強かったもののマッチングという仕組みはうまく機能しているようである。今は、自分を採用してくれた病院に対して感謝しつつ、仮契約を本契約に結び付けるべく国家試験に向けて邁進するのみの毎日である。

マッチングと国試は6年生で通過する2大イベントだと思うが、私はマッチングのほうがより重要であると考えている。国試は9割が合格する、いわば「合格が前提」のイベントだし合格か不合格の2択以外に選択の余地がないが、マッチングはこれからの数年の生活を決め、ひいては医者人生の大基盤を決定する重要性を持っている。見学、受験病院の選定を通じて自分の生涯を通じてやりたいこと、野望などを腰をすえて考える初めての機会であるとともに、有名病院では倍率も高く、国試よりもよっぽど門が狭いため、心してかからなければいけない手ごわい機会でもある。よく一般企業において「就活は自分との戦いであり、就活を通して学生は大人になる」といわれるらしい。一般企業よりは敷居も倍率も比較にならないほど低いものの、医学生におけるマッチングも同じような役割を担っていると思う。一般就活用の本を読み自己分析をしたり、周囲の友人たちに相談するなどして、自分のやりたいことやキャリアプランを練ったり、面接の中で評価していただいたこと、うまくいかなかった場合には帰り道で猛烈に反省したことなどを通して、たとえ自分の希望研修先にマッチしなかったとしてもいいと思えるほど、自分の人間的成長につながった機会であったと思う。ご多忙の中推薦書を書いていただいた腫瘍病理学講座の田中伸哉先生をはじめ、様々な方にお世話になりながらのマッチングであった。この場をお借りして謝意を述べつつ、同期である86期生のこれからのマッチ病院での活躍を祈念し、感想とさせていただきます。

5 お知らせ

医学部創立90周年記念事業募金活動ー第12報ー ー募金目標額まであと3千万円となりましたー

医学部創立90周年記念事業基金の募金活動についてお知らせします。平成21年10月末現在の募金の納入状況は表のとおりとなっています。全体額が4億7千万円を突破しました。募金目標額5億円まであと約3千万円です。本募金活動へのご理解とご協力に心より感謝申し上げます。

平成21年10月12日には医学部創立90周年記念式典・祝賀会が盛会裡に終了しました。また、すでに

小山 司 医学部創立90周年記念事業実行委員会副委員長

医学部図書館は改修（講義室の整備）を終え、現在、医学部会館（フラテ会館）の建設工事が始まっています。皆様のご協力により創立90周年記念事業計画は着々と進行しているといえます。

募金期限は平成22年3月末となっています。医学部・病院教員はもとより同窓会の皆様、また関係各方面の皆様におかれましては、引き続きご理解とご協力をお願いする次第です。

第52回東日本医科学生総合体育大会

第52回東日本医科学生総合体育大会の夏季部門が、山形大学医学部・秋田大学医学部・岩手医科大学・福島県立医科大学を主管校として、8月上旬に開催されました。

本学からは15団体が出場しました。おもな結果は以下の通りです。

バレーボール男子	優勝
バスケットボール男子	準優勝
ソフトテニス女子団体	準優勝
ボート	3位



北大医学部硬式テニス部

奈良場 啓 東医体評議委員（医学科3年）

また、冬季部門はスキーが3月中旬に田沢湖スキー場で、アイスホッケーが12月下旬に苫小牧市白鳥アリーナで開催される予定です。



北大医学部バスケットボール部

平成21年度 医学研究科・医学部医学科「優秀研究賞」、 「優秀教育賞」、「優秀論文賞」及び「特別賞」受賞候補者の推薦

医学研究科・医学部医学科教職員・学生等の顕彰に関する内規に基づく、平成21年度各賞（優秀研究賞、優秀教育賞、優秀論文賞、特別賞）受賞候補者の推薦を平成22年1月4日（月）～平成22年1月29日（金）の期間受け付けます。（優秀研究賞、優秀教育賞及び優秀論文賞は、自薦も可）

なお、今年度から優秀論文賞の選考基準がインパクトファクター10.0以上（従来は15.0以上）となりましたので、多数の応募をお待ちしております。

○賞の種類及び対象

- (1) 優秀研究賞：顕著な研究業績をあげた専任教職員
- (2) 優秀教育賞：顕著な教育業績をあげた専任教職員
- (3) 優秀論文賞：特に優れた論文を発表した専任教職員・学生等
- (4) 特別賞：医学研究科、国内又は国際社会に顕著な貢献をした専任教職員・同窓生

○各賞の人数及び副賞額

- ① 優秀研究賞・優秀教育賞：年に各1名、副賞は1人当たり100万円相当
- ② 優秀論文賞：年に若干名、副賞は1人当たり10万円相当
- ③ 特別賞：副賞は1人（1件）当たり100万円相当

○提出書類：受賞候補者推薦書及び候補者調書

○推薦書等の提出先：医学系事務部総務課庶務担当

○受賞候補者推薦書・候補者調書の請求先：

E-mail：shomu@med.hokudai.ac.jp

平成21年度医学部医学科学士編入学 （第2年次第2学期）試験結果について

平成21年度医学部医学科学士編入学（第2年次第2学期）試験（募集人員5人）について、7月25日（土）第1次選抜試験、8月20日（木）実施の第2次選抜試験を経て、8月28日（金）に最終合格者5人を発表いたしました。

入試データ

志 願 者	354人（男216人、女138人）
第1次選抜受験者	304人（男181人、女123人）
第1次選抜合格者	32人（男21人、女11人）
第2次選抜受験者	29人（男18人、女11人）
最終合格者	5人（男2人、女3人）

第104回医師国家試験について

来週2月に実施される第104回医師国家試験の日程が7月1日付けの官報により次のとおり公表されました。

出願期間	平成21年11月16日（月）～12月4日（金）
試験日	平成22年2月13日（土）・14日（日）・15日（月）
合格発表	平成22年3月29日（月）午後2時

なお、願書等の書類の提出については、北海道厚生局からの要請により、卒業見込み者については、医学科教務担当で願書等取りまとめ、一括して提出することになっております。具体的な日程・方法等については、決定次第お知らせいたしますが、受験予定者にあつては提出期限の厳守等、ご協力をお願いします。

管理棟改修工事について

平成22年度施設整備費概算要求で上げておりました「管理棟耐震改修」を施設部の要望もありまして、平成21年度に前倒しで実施する事になりました。

着工は平成21年12月6日、完成は平成22年3月26日を予定しております。

平成22年度大学院入学試験について

去る、8月31日（月）に修士課程、9月2日（水）に博士課程（前期）の入学試験が実施され、9月18日（金）にそれぞれ合格者が発表されました。

各課程の志願者・受験者・合格者は次のとおりです。

区 分 \ 課 程	修士課程	博士課程（前期）	博士課程（MD-PhD特別選抜）
志 願 者	26名（男12名、女14名）	35名（男23名、女12名）	2名（男 1名、女 1名）
受 験 者	25名（男12名、女13名）	35名（男23名、女12名）	2名（男 1名、女 1名）
合 格 者	24名（男11名、女13名）	34名（男22名、女12名）	2名（男 1名、女 1名）

修士課程の第2次募集及び既に公表している博士課程（後期）募集日程は、次のとおりです。

事 項 \ 課 程	修士課程（第2次募集）	博士課程（後期）
出願資格審査申請期間	平成21年11月10日（火）～11月16日（月）	
入 試 説 明 会	平成21年12月6日（日）13：00～	
出 願 期 間	平成21年12月8日（火）～12月14日（月）	平成21年12月1日（火）～12月7日（月）
試 験 日	平成22年1月18日（月）	平成22年1月20日（水）
合 格 発 表 日	平成22年2月5日（金）	

6 事務部から

寄附金納入状況（H21.10.31現在）

寄附金合計 472,174,252円

◎教 員	253名／ 438名（57.8%）	44,220,000円
（内訳）		
医 学 科 教員	122名／ 151名（80.8%）	25,640,000円
68.7% 特任教員	10名／ 30名（33.3%）	790,000円
病 院 教員	93名／ 174名（53.4%）	11,970,000円
52.9% 特任教員	2名／ 5名（40.0%）	300,000円
保健学科 教員	26名／ 78名（33.3%）	5,520,000円
29.5%		
◎分 野	3件	1,800,000円
◎同門会（団体）	2件	2,000,000円
◎同窓生（教員は除く）	1309名／6010名（21.8%）	229,104,367円
◎学生の父母	120名／1434名（ 8.4%）	14,329,885円
（内訳）		
医 学 科	93名／ 598名（15.6%）	11,909,885円
保健学科	27名／ 836名（ 3.2%）	2,420,000円
◎大学院生	1件	210,000円
◎法人・企業等	223件	174,770,000円
◎篤志家 （団体・個人（同門会員を含む））	34件	5,740,000円

教員寄附者のご芳名（平成21年10月31日現在 敬称略）

医学研究科

教授

秋田 弘俊, 有賀 正, 有川 二郎, 今村 雅寛,
岩崎 喜信, 岩永 敏彦, 近江谷克裕, 大野 重昭,
笠原 正典, 神谷 温之, 川口 秀明, 丸藤 哲,
岸 玲子, 久下 裕司, 小池 隆夫, 小山 司,
近藤 哲, 櫻木 範明, 佐々木秀直, 佐々木文章,
清水 宏, 白土 博樹, 須藤 英毅, 瀬谷 司,
田中 伸哉, 玉木 長良, 玉城 英彦, 筒井 裕之,
寺沢 浩一, 藤堂 省, 永井 栄一, 西村 正治,
野々村克也, 畠山 鎮次, 福島 菊郎, 福田 諭,
藤田 博美, 古川 博之, 本間 研一, 本間 さと,
前沢 政次, 眞島 任史, 水上 尚典, 三浪 明男,
三輪 聡一, 武藏 学, 森本 裕二, 安田 和則,
山本 有平, 吉岡 充弘, 渡邊 雅彦

准教授

秋山 真志, 伊東 学, 岩永ひろみ, 岡本 洋,
折館 伸彦, 神山 俊哉, 川村 信明, 久住 一郎,
工藤 正尊, 篠原 信雄, 末永 直樹, 田川 義継,
田中 淳司, 田中 真樹, 趙 松吉, 傳田 健三,
飛騨 一利, 平野 聡, 蒔田 直昌, 松本美佐子,
矢部 一郎, 山田 秀人, 吉岡 成人

講師

青山 英史, 木下 一郎, 小谷 善久, 七戸 俊明,
高野 廣子, 田島 敏広, 堤田 新, 吉永恵一郎

助教

秋元 秀俊, 泉 剛, 猪熊 大輔, 小山内 努,
大塚 紀幸, 押海 裕之, 小野寺 伸, 鐘ヶ江香久子,
権 赫準, 加納 里志, 川畑 秀信, 北村 信人,
小林 純子, 澤村 淳, 志賀 哲, 清水 健太,
鈴木 友己, 武市 紀人, 田中 輝明, 棚橋 祐典,
津田真寿美, 土佐 紀子, 富居 一範, 中川 伸,
中西 一彰, 中村 利仁, 新野 正明, 西出 真也,
橋本 聡一, 深谷 昌弘, 古川 洋志, 的場光太郎,
宮崎 太輔, 山崎美和子, 森松 組子, 築瀬 晴子,
山口 拓, 湯浅 資之, 吉岡 英治, 吉田 隆行,
和田 雅子

助手

中村 秀樹, 橋本 聡子, 古田 伊都子

異動者

武田 宏司

退職者

櫻井恒太郎, 佐々木 了, 佐田 文宏, 澤村 大輔,
柴田 雅彦, 高山 千利, 西江 渉, 藤川 恵子,
古田 康, 松本真知子

病院

教授

浅香 正博, 生駒 一憲, 松居 喜郎, 松野 吉宏

准教授

加藤 元嗣, 佐藤 直樹, 椎谷 紀彦, 嶋村 剛,
菅原 満, 長 和俊, 寺江 聡, 遠山 晴一,

講師

阿部理一郎, 渥美 達也, 石川 岳彦, 井上 猛,
岩崎 倫政, 加賀基知三, 片岡 昭彦, 粕野 繁雄,
神島 保, 黒田 敏, 齋藤 伸治, 佐々木 聡,
澤村 豊, 芝木 晃彦, 高畑 雅彦, 瀧田 恒一,
陳 進輝, 中丸 裕爾, 髭 修平, 樋田 泰浩,
本間 明宏, 山田 聡, 横式 尚司, 吉田 和彦

助教

青柳 哲, 秋本 幸子, 安部川智浩, 石黒 信久,
石森 直樹, 伊藤 圭, 上野 倫彦, 賀古 勇輝,
片岡 浩, 北市 伸義, 工藤 興亮, 神津 将仁,
齋藤 航, 高木 大, 沢口 直弘, 首藤 聡子,
鈴木 章之, 高橋 典彦, 高橋 将人, 津布久 崇,
寺坂 俊介, 藤堂 幸治, 中村 高士, 中山 若樹,
南場 研一, 西 信也, 秦 琢磨, 原澤 克己,
久野健二郎, 廣瀬 茂樹, 松尾雄一郎, 三井 貴彦,
宮本 正樹, 山田 俊, 渡部 琢哉

助手

木田 敦知

医員

伊藤 候輝, 栗田 紹子, 櫻井高太郎, 橋本 直樹,
増井 拓哉

退職者

阿部由紀子, 夷岡 徳彦, 蝦名 康彦, 小川 智生,
柏村 正明, 北市 雄士, 國原 孝, 小玉 和郎,
小山 明彦, 鈴木 温, 鈴木 清護, 関堂 充,
長田 陽一, 畠山 博充, 原林 透, 本間 次郎,
宮坂 和男, 村下十志文, 森田 研, 矢野 俊介,
山中 啓義

医学部保健学科

教授

石津 明洋, 小林 清一, 齋藤 健, 酒井 正春,
佐川 正, 武田 直樹, 千葉 仁志, 西岡 健,
八田 達夫, 福島 順子, 松下 通明, 松野 一彦,
三神 大世, 宮本 顯二, 村田 和香, 森下 節子,
森山 隆則, 山本 徹, 良村 貞子

准教授

加藤千恵次, 河原田まり子, 高橋 光彦

退職者

上野 武治, 大宮司 信, 中村仁志夫, 武藤眞佐子

（「退職者」は、平成18年9月以降に寄附をした後退職された方）

平成21年度 財団等の研究助成採択状況

財団法人等名	種 別	研究者名	交 付 金
大学共同利用機関法人情報・システム研究機構 国立遺伝学研究所	2009年度共同研究A	笠 原 正 典	180,000
社団法人 日本皮膚科学会	基礎医学研究費	猪 熊 大 輔	500,000
財団法人 成人血管病研究振興財団	平成21年度学術研究支援	西 本 新	500,000
財団法人 喫煙科学研究財団	平成21年度研究助成	三 輪 聡 一	4,000,000
		吉 岡 充 弘	2,000,000
		秋 田 弘 俊	2,500,000
		別 役 智 子	5,000,000
		玉 木 長 良	2,000,000
財団法人 日本応用酵素協会	平成21年度研究助成	岩 永 ひろみ	1,000,000
財団法人 三島海雲記念財団	平成21年度学術研究奨励金	岩 永 敏 彦	1,000,000
財団法人 秋山記念生命科学振興財団	研究助成（一般）	秋 山 真 志	1,000,000
		外 丸 詩 野	1,000,000
	研究助成（奨励）	津 田 真寿美	500,000
		猪 熊 大 輔	500,000
財団法人 伊藤医薬学術交流財団	学会等助成	本 間 研 一	450,000
		福 田 諭	450,000
	交流助成	吉 岡 英 治	200,000
		大 村 優	200,000
	招聘助成	西 村 正 治	200,000
社団法人 全日本コーヒー協会	研究助成	神 谷 温 之	1,500,000
財団法人 日本リディオリリー協会	研究助成金	有 田 賢	500,000
ネスレ栄養科学会議	研究助成	神 谷 温 之	1,000,000
財団法人 石本記念デサントスポーツ科学振興財団	研究助成金	絹 川 真太郎	500,000
財団法人 札幌国際プラザ	札幌国際プラザ助成金	本 間 研 一	80,000
財団法人 北海道大学クラーク記念財団	博士後期課程在学研究助成	藤 田 靖 幸	500,000
		須 藤 洋 一	450,000
		夏 賀 健	500,000
		王 磊	500,000
		佐々木 知 幸	500,000
財団法人 三井生命厚生事業団	研究助成金	小 谷 善 久	1,000,000
財団法人 金原一郎記念医学医療振興財団	基礎医学医療研究助成	畠 山 鎮 次	500,000
財団法人 伊藤科学振興会	研究助成	安 東 頼 子	800,000
社団法人 日本医師会	研究助成	瀬 谷 司	1,500,000
	医学賞（社会医学）	岸 玲 子	5,000,000

平成21年9月30日までの採択判明分

平成21年度科学研究費補助金採択状況

単位：千円

研究種目	新規申請	継続申請	交付内定（採択）	平成21年度交付決定	
	件数	件数	件数	件数	交付金額
特別推進研究	0	0	0	0	0
特定領域研究	4	8	8	10	66,920
基盤研究（S）	3	1	1	1	22,360
基盤研究（A）	8	4	7	8	121,030
基盤研究（B）	24	14	23	19	145,860
基盤研究（C）	40	21	38	41	66,560
挑戦的萌芽研究	39	6	14	13	20,800
若手研究（S）	3	0	0	0	0
若手研究（A）	1	4	4	4	35,230
若手研究（B）	22	5	15	17	36,270
若手研究（スタートアップ）	7	2	4	3	4,238
新学術領域研究（領域提案型）	10	1	2	2	7,410
新学術領域研究（課題提案型）	2	0	1	1	10,920
合 計	163	66	117	119	537,598

※交付内定は申請に対する採択のため、申請後、採択時までの医学研究科の研究者の転入出を含まない。

※交付決定は採択時までの医学研究科の研究者の転入出、辞退等を反映させた数字

※採択率（新規・継続を含む） $117 \div 229 = 51.1\%$

※平成21年10月1日現在

広報室便り11

4月以降、新しい安田研究科長・医学部長体制下の内容とした医学研究科・医学部医学科概要および医学研究科案内、医学科案内の日本語版と英語版の作成を終えました。また、オープン・ユニバーシティに使用された新しい医学部教育カリキュラムを盛り込んだDVDの作成も無事終わっています。またロゴマーク・指定書体を新しくして、9月にはホームページから画像データをダウンロードできるサービスも開始しました。現在は、その作成が遅れている教育白書の作成補助、来年3月に完成予定の北大医学部創立90周年記念誌の作成にあたっています。HPに関しては国際的に評価の高い賞を受賞した医学研究科の研究・研究者の紹介を積極的に行い、大学院生の書類手続きに必要なフォームをダウンロードできるようにするなどの作業を行っています。これからも飛躍する北大医学研究科・医学部の活躍を逐次紹介する役を担っていきます。

野々村克也（広報室長）

編集後記

10月には記念すべき北大医学部90周年式展が開催されましたので、本号では、研究科長の式辞とともに式次第を掲載しました。また、新機能をもつ医学部図書館が10月に竣工し、第1・第2講堂とも稼働しています。小さい文字は近くのモニターを参照できるから大変便利と学生さんからも好評です。今回基礎の講義の様子を是非広報したいと考え、生化学の畠山教授にお願いして講義風景を撮影させていただきました。オープンユニバーシティの様子は教務係の原田さんがいい写真をたくさん撮影していただいたので使用させていただきました。また、少しでも読者の皆様が手にとりやすい、読みやすい紙面を心がけており、本号では目次をつけて多少デザインを変更しています。何かよりよいアイディアあればご連絡をお願いします。

（広報編集委員長 田中 伸哉）

— Home Pageのご案内 —

医学研究科／医学部医学科広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付けメールアドレスは、

goiken@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科／医学部医学科

発行 北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科
広報編集委員会

060-8638 札幌市北区北15条西7丁目

連絡先 医学系事務部総務課庶務担当

電話 011-706-5892

編集委員 田中 伸哉（委員長）、白土 博樹、
玉城 英彦、佐藤 松治